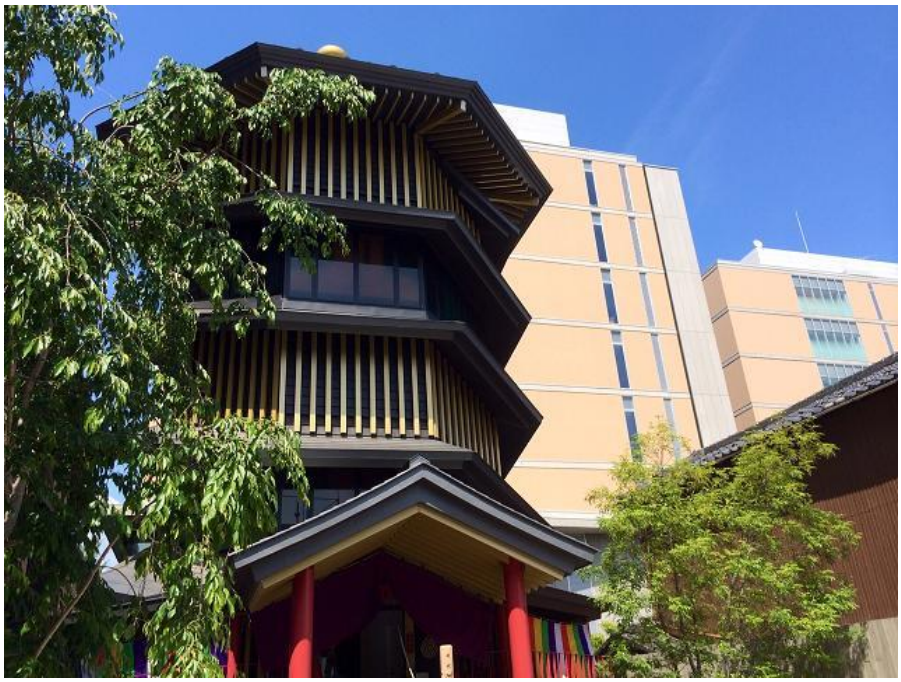

BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 4 号

平成 26 年 7 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470　東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079（直通）

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

目次

1 頁　：　巻頭言
2 頁　：　さざえ堂だより
3 頁　：　研究ノート
4 頁　：　BSR 図書室・今後の予定

仏 教 事 始

就職総合支援センター長
人間学部　特命教授
木 元 修 一

この 2 年ほど就職や進路指導の仕事に携わっている。学生は縁あって本学に入学し学び、友人を作り、様々な経験をして社会に旅立っていく。本人の希望に沿って進路が確定すればいいが、必ずしもうまくいくとは限らない。本人は悩む。気持ちを聞きできる限りのアドヴァイスをする。ひとりひとり置かれている状況が異なる中で、相談に乗ることは簡単ではないし、辛抱強さが必要だ。

本学らしい進路指導を模索していたときに、それは建学の精神、＜智慧と慈悲の実践＞に基づくべきであると考えた。慈悲の心がなければ、迷ったり苦しんだりしている学生に、暖かく寄り添って、一緒に考えてあげることはできない。また智慧がなければ、真に適切な指導はできない。

そこで改めて仏教を学び直そうと思い、いくつかの解説書を手に取った。するとその広大な世界、豊かな流れに驚くばかりである。知識としてとらえれば、到底極めつくすことなどできない。しかし仏教の基本的な概念はそう難しいものではない。あたりまえのことを説いている。「三法印」「四諦」「八正道」「六波羅蜜」「五戒」「三学」「四無量心」など、どれも普遍的な教えであるように思われる。

では何が難しいのかといえば、実行することが難しいのである。我々は煩悩の固まりで、煩悩を充足させることが幸せだと思っているからだ。しかもそれが強い我執によって、自己中心的に考えがちだからだ。仏教書を読んで清々しい気持ちになっても、果たして何日、いや何時間もつだろうか。

「法句経」の最初に「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくりだされる」とある。意馬心猿というごとく、心はたえず外界の刺激によって良くも悪しくも揺れ動く。この心をどうコントロールすればいいのだろうか。大峯千日回峰行を達成された塩沼亮潤師は、右足を出すとき「謙虚」、左足は「素直」と唱えながら歩いたそうだ。

学生と向き合っていると、こちらの力量不足を見透かされているような気分になる。どこまで本当に愛情をもっ

て接しているのか。指導できるだけの力があるのか。これに対するには少しでも自分を高める以外にないと思う。

現在ＣＥＣの仲間達と毎朝朝礼を行っているが、その始めと終わりにみんなで合掌している。付け焼刃かもしれないが形から入ることも大事だと思って続けている。少しでも効果があるといいのだが。

＜就職総合支援センター/CEC（キャリア・エデュケーション・センター）とは？＞

就職総合支援センター/CEC は、TSR マネジメント推進機構の中で、大正大学の社会的責任（TSR）のうち、社会的要請に対応する人材育成を目的として設置された大正大学の学生の就職活動を支援する組織です。

単に就職活動の支援だけではなく、基礎教育、各自の学科の専門教育と相俟って学生の「人柄力」を磨き社会の即戦力となれる人材育成を目指し、キャリア支援と就職支援の両面から学生一人ひとりにマッチした支援を行っています。

さざえ堂だより

早いもので、すがも鴨台観音堂（さざえ堂）が誕生してから 1 年とひと月が経ちました。さざえ堂では毎月恒例の法要（花会式）や季節に合わせたイベントを行っており、巣鴨の新しい名所となりつつあります。またイベントに限らず、毎日大勢の参拝者が訪れています。

さざえ堂には、昨年 9 月からお堂番を配置して参拝者への案内とともに、毎日の参拝者数を記録してもらっていますが、6 月末で 20,000 人を超えました。特にこのところ増えてきたのが団体の参拝です。

以前から“歩こう会”などの団体や地域の歴史を訪ねる街散策の団体の方にはお越しいただいておりましたが、今年度になってから宗門の関係の団体が増えています。具体的には、宗門関係者が中心となっている本学同窓会組織である鴨台会の支部等の方々、教区寺庭婦人会の方々、そして本学仏教学科の先生が住職を務めているご寺院のお檀家さんを連れてお参りいただいた団体参拝等です。このような団体の参拝が 5 月、6 月で 6 件もありました。

特に寺庭婦人会、寺院のお檀家さんをつれての参拝では、バスで都内の寺院・名所をまわる中に大正大学を行程にいれていただきました。大学の後に巣鴨の眞性寺様、とげぬき地蔵高岩寺様をお参りし、巣鴨の商店街でお買いものを楽しんでお帰りになられたようです。ちょうど東京近郊からの一日バス旅行に最適なのかもしれません。

お越しいただいた皆様には、さざえ

堂にお参りいただくとともに、学内の最新設備の教室やスタジオ等の教育施設、各宗派の法儀実習室（勤行室）をご覧いただいたり、プリンスホテルが運営している「鴨台食堂（おうだいじきどう）」で昼食やティータイムをとっていただいたりしています。

今後は、大学の施設や知的財産を生かし、さらに付加価値をつけてさざえ堂にお参りいただけるような団参受け入れを模索していきたいと考えております。（M）

研究ノート

臨床宗教師の可能性②

―台湾の事例―

先月号では、東北大学実践宗教学寄附講座で養成されている「臨床宗教師」について説明をしました。今回は海を渡って台湾に目を向けてみたいと思います。

国立病院にお坊さん？

首都・台北にある国立台湾大学（通称、台大）。その医学部に付属する病院では、お坊さんを頻繁に見かけます。それも、患者としてではなく、医療スタッフとして、です。お坊さんたちは「臨床仏教宗教師」という有資格者として病院で働いているのです。

台湾大学といえば、台湾でナンバーワンのエリート大学ですから、日本でいえば東京大学のようなもの。東大病院でお坊さんが働いているのを想像していただければ、みなさんは、不思議な感じをお持ちになるのではないでしょうか。

台湾では、台大病院に限らず、30 を超える病院で臨床仏教宗教師が勤務しているといいます。

臨床仏教宗教師とはどんな資格、仕事なのでしょうか。

臨床仏教宗教師

台大病院に緩和ケア病棟（ホスピス）が開設されたのは、1995 年。当時、副医院長であった陳榮基教授は、患者のケアに宗教者が関わる必要性を感じていました。

前年、緩和ケアや死生学の推進のために仏教系大学などが協力して仏教蓮花基金会という財団を設立し、その理事長には陳教授が就いていました。基金会は、台大ホスピスを統括する家庭医学科部長の陳慶餘氏に要請し、緩和ケアの現場で活躍できる出家者の養成プログラムを企画・運営を開始することになります。

およそ 3 年の準備期間を経て、1998 年、臨床仏教宗教師の養成プログラムが始まりました。その講座は、60 単位以上、最低 5 年の履修が必要となる、かなりハードな内容となっています。ジョナサン・ワッツ＆戸松義晴「台湾の『公共的仏教』―終末期ケアのための臨床仏教運動」（『社会貢献する仏教者たち』臨床仏教研究所編、白馬社、2012 年）に講座の概要が記されているので、紹介しましょう。

講座は、看護医療講座を受講した上で、以下の 4 つのステージで構成されたプログラムを受けることになります。

1、一般教養（28 単位）：ホスピスケア・緩和ケアの意義、ケアチームの各々の役割などを学ぶ。
2、共通課程（16 単位）：スピリチュアルケアの意義や定義、それを現場での実践に活かす方法。
3、専門科目（14 単位）：1と2の修了者が受けるもので、具体的なカルテの読み方、理解、活用方法などを学ぶほか、ケアに仏教がどう活かされるかを学ぶ。
4、臨床実習（4 週間の実習）：1から3のコースを終えた出家者は、まずひとつのケースワークに従事し、教官の指導を受ける。そして、適性が評価された者だけが、ケアチームの一員としてすべての臨床実習をおこなうことができる。

また、受講の前提として、意欲や教育レベルをはかるための面接による選考が行われます。

講座開設以来、2009 年までの 10 年間で 73 名が受講し、30 名近い僧侶が臨床仏教宗教師として、病院で勤務しているということでした。

台湾と日本の相違

台湾での臨床仏教宗教師の試みは成功していると言えるでしょう。しかし、では、これをそのまま日本に持ち込めるかというと、そう簡単にいかないとも思います。

台湾で成功した要因のひとつには、仏教信仰の篤さ、出家者への信頼度の高さが挙げられます。台湾人の 8 割が仏教徒と言われ、日本人とは異なり明確な信仰として持っています。また、台湾の主要仏教団体として、仏光山、慈済会、法鼓山、中台禅寺の４団体があり、それぞれが積極的にボランティア活動、社会活動を行い、また大学やテレビ局を持つなど、発信力も強いものがあります。

出家者がしっかりと戒律を守っていることも信頼につながっています。台湾の出家者の７割以上が女性というのも特徴的で、勉学に熱心で、知的レベルも高いと聞きます。

もうひとつの要因として、陳教授の存在もあります。医療の側で強いリーダーシップを発揮できる人物が、先頭に立ってくれたということも、大いに役立ったと言えます。

日本とは異なる台湾の社会的・文化的背景が、公的領域への出家者の進出を容易にしたとはいえ、それでも参考にすべき点は多分にあることでしょう。（O）

BSR 図書室

大河内大博著『今、この身で生きる』

（ワニブックス、2014 年、952 円＋税）

「自分の人生とは一体何だったの？」「どうして死ななきゃいけないの？」死を間近に控えた人からそう問われたら何と答えたらよいのでしょうか。終末期にのぞむ人たちを前に、私たちは何ができるのでしょう。

本書は仏教版ホスピス活動ともいわれるビハーラ活動を紹介しながら、僧侶は「死」を迎える人々にどうあるべきかを問うものです。著者の大河内さんは、僧侶でありながら終末期医療の現場にボランティアスタッフとして関わり、近い将来に「死」を迎える患者さんたちと向き合う日々を送っています。

著者は自身の体験談を交えながら、ビハーラ活動では患者さんが口にする言葉に込められた“メッセージ”をキャッチすることが大切なことだといいます。また、亡くなりゆく人同様、遺された人も苦しみを抱えています。大切な人を失った悲しみをどうにかして断つのではなく、ゆっくりと時間をかけて歩みを進める。そんなグリーフケア（喪失の悲嘆に対するサポート）をすすめます。

しかし本書で示されるのはビハーラのマニュアルではありません。あくまでも現場に立つ僧侶の心構えや姿勢です。なぜなら、現場に絶対の答えはなく、そのたびごとの物語を紡いでいくことが大切だからです。著者は浄土宗の僧侶であるため、浄土教の教えに依拠するところが大きいようですが、確固たる信仰を持つことも重要であると説かれています。揺らがぬ信仰に支えられたケアの姿勢から、現代における僧侶のあり方を考えてみるのもよいかもしれません。（T）

今後の予定

7 月 19 日（土）	11 時～12 時	花会式（真言宗智山派）	鴨台観音堂前
	12 時～16 時	鴨台カフェ　僧話花	5 号館 1 階
8 月 16 日（土）	11 時～12 時	花会式（子ども寺子屋）	鴨台観音堂前
		※ 法要はありませんが、夏休み特別企画として子ども向けに雅楽鑑賞会をおこないます	
	12 時～16 時	鴨台カフェ　僧話花	5 号館 1 階